

鳥取県医師会報

MONTHLY JOURNAL OF TOTTORI MEDICAL ASSOCIATION



平成28年5月15日発行(毎月1回15日発行)
ISSN 0915-3489

公益社団法人鳥取県医師会 会長 魚谷 純
平成28年度鳥取県医師会春季医学会 学会長
医療法人十字会野島病院 院長 山本 敏雄

平成28年度鳥取県医師会春季医学会 (日本医師会生涯教育講座)

標記の春季医学会を下記のとおり開催いたしますので、ご案内申し上げます。
会員各位始め、多数の方々にご参集いただきますようお願い申し上げます。

期日 平成28年 6月26日(日)

場所 新日本海新聞社中部本社ホール
倉吉市上井町1丁目156番地
TEL 0858-26-8340

日程 開会・挨拶 ● 9:30
一般演題 ● 9:35~12:06
特別講演 ● 12:15~13:15
「男女共同参画社会における女性医師の現況と今後の課題
—日本医師会男性医師の意識調査報告書を参考に—」
医療法人十字会野島病院
内科部長 松田 隆子 先生
閉会 ● 13:15

*一般演題 16題

*日本医師会生涯教育協力講座

取得単位 3.0単位

取得カリキュラムコード

2 医療倫理:臨床倫理(0.5単位) 7 医療の質と安全(0.5単位)

11 予防と保健(0.5単位) 15 臨床問題解決のプロセス(0.5単位)

73 慢性疾患・複合疾患の管理(0.5単位) 76 糖尿病(0.5単位)

*このプログラムは当日ご持参ください。

公益社団法人 鳥取県医師会

プログラム

開会・挨拶 9:30 公益社団法人鳥取県医師会 会長 魚谷 純
学会長 山本 敏雄 (医療法人十字会野島病院 院長)

一般演題 (口演7分, 質疑2分)

- | | | | |
|---|-------------|----|---------------------------------------|
| 1 脳疾患 | 9:35~9:44 | 座長 | 森本 益雄 (森本外科・脳神経外科医院) |
| 1) 鞍結節髄膜腫の1手術例 | | | 鳥取市立病院 脳神経外科 谷浦晴二郎 他 |
| 2 糖尿病 | 9:45~10:03 | 座長 | 天野 道磨 (天野医院) |
| 2) 2型糖尿病患者に対するインスリン需要度判定にグルカゴン負荷試験が果たす役割 | | | 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 内科 竹田 晴彦 他 |
| 3) 糖尿病治療薬 (DPP-4阻害薬) 著効症例の検討 | | | 鳥取市 老人保健施設ふたば・長野県 特定医療法人新生病院 内科 杉山 将洋 |
| 3 消化器疾患 | 10:04~10:22 | 座長 | 宇奈手一司 (うなてクリニック) |
| 4) 鳥取県北栄町における中学生を対象としたヘリコバクター・ピロリ検診
一胃がん一次予防に向けた試み (第一報) 一 | | | 鳥取県立厚生病院 内科 秋藤 洋一 他 |
| 5) 上腸間膜動脈症候群の1例 | | | 鳥取県済生会境港総合病院 内科 坂口 琢紀 他 |
| 4 健診 | 10:23~10:41 | 座長 | 新田 辰雄 (新田内科クリニック) |
| 6) 平成22年 (2010) 年度健診受診者の性別・年齢別の肥満の頻度 | | | 鳥取赤十字病院 検査部 塩 宏 |
| 7) 当院健診受診者にみられた単独低HDL-C血症 ($\leq 29\text{mg/dl}$) の1例 | | | 鳥取赤十字病院 検査部 塩 宏 |
| 5 保健活動 | 10:42~11:00 | 座長 | 野田 博司 (野田外科医院) |
| 8) 鳥取県独自の禁煙治療助成事業の評価について | | | 鳥取県倉吉保健所 吉田 良平 他 |
| 9) ロコモティブシンドロームの予防を目的とした必須アミノ酸を併用した
ロコトレ運動教室の有用性について | | | 南部町国民健康保険西伯病院 木村 修 他 |
| 6 呼吸器疾患 | 11:01~11:19 | 座長 | 山本 芳磨 (垣田病院) |
| 10) まれな肺腫瘍の1手術例 | | | 鳥取県立厚生病院 外科 大島 祐貴 他 |

11) 術後8年目に肺転移で再発した肺MALTリンパ腫の1手術例

鳥取県立厚生病院 外科 松岡 佑樹 他

7 血液 11:20~11:38 座長 鳥飼 高嗣 (鳥飼内科)

12) 健診にて発見されたβサラセミアの1例

鳥取県立中央病院 血液内科 福田 貴規 他

13) 血液疾患患者における末梢挿入式中心静脈カテーテル留置の現状

鳥取県立中央病院 血液内科 橋本 由徳 他

8 心・血管 11:39~12:06 座長 岡田耕一郎 (岡田医院)

14) 重症下肢虚血に対して足関節にバイパス術を施行した1例

鳥取県立厚生病院 外科 西村 謙吾 他

15) 当院透析患者の弁膜症の検討

鳥取市 三樹会吉野・三宅ステーションクリニック 吉野 保之 他

16) 後期高齢女性患者(96歳)で認めたエプスタイン奇形例

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 内科 竹田 晴彦 他

特別講演 12:15~13:15 座長 山本 敏雄 (野島病院)

「男女共同参画社会における女性医師の現況と今後の課題

—日本医師会男性医師の意識調査報告書を参考に—」

医療法人十字会野島病院 内科部長 松田 隆子 先生

一 般 演 題

1 脳疾患 9:35~9:44 座長 森本 益雄 (森本外科・脳神経外科医院)

1) 鞍結節髄膜腫の1手術例

鳥取市立病院脳神経外科 ^{たにうら}谷浦 ^{せいじろう}晴二郎 赤塚 啓一

症例は70歳代男性で、半年前より左視力低下があり、眼科より頭蓋内病変を指摘され当科紹介となる。受診時は、意識清明、視神経症状以外に特に脱落症候はなく、視力は右0.3 (0.8), 左0.02 (n.c.), その後さらに悪化し光覚弁となる。左側鼻側視野欠損を認めた。下垂体前葉機能の基礎値は正常であった。画像上、トルコ鞍上部に病変を認めた。鞍結節髄膜腫の術前診断にて開頭摘出術を行った。肉眼的には病変の全摘出がなされた。術後左眼上方の視力は改善し、顔の認識は可能となった。鞍結節髄膜腫において、硬膜付着部は鞍結節に限らず、視交叉溝、鞍隔膜前鞘、蝶形骨平面後縁に付着部があり、主として正中に発達・増大して視交叉症候群を来す。女性にとりわけ多い傾向あり (男女比1対3)。通常は、片側の視力障害に始まり、数か月から数年で対側の視力障害といわれている。

2 糖尿病 9:45~10:03 座長 天野 道麿 (天野医院)

2) 2型糖尿病患者に対するインスリン需要度判定にグルカゴン負荷試験が果たす役割

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院内科 ^{たけだ}竹田 ^{はるひこ}晴彦 松田 善典 塩 孜
山成 俊夫 芦田 耕三

インスリン需要度を判定する指標として、グルカゴン負荷時の血中CPR反応量 (Δ CPR) と一日尿中CPR (u-CPR) の二者の比較検討、およびROC曲線を用いてインスリン重要度を決定する項目を調べたが、CPIインデックス (FCPR/FBS \times 100) がROC曲線下面積が最大であり、CPI0.9未満でインスリン治療と判断できた。

3) 糖尿病治療薬 (DPP-4阻害薬) 著効症例の検討

鳥取市 老人保健施設ふたば・長野県 特定医療法人新生病院内科 ^{すぎやま}杉山 ^{かつひろ}将洋

インクレチン製剤が2009年に初めてわが国に発売された。年々、増え続ける糖尿病患者に現在一番多く処方されている治療薬はインクレチン製剤であると云われる。その薬理作用が生体のホメオスタシスに強く影響を与える為に副作用の発現の問題もあるなか、HbA1cを平均で約1%低下させるといわれている。そして、これまではっきりした副作用は報告されていない。症例は60才代、男性で、HbA1c11.2%にて他医にて食事療法とSU剤を処方されていた患者にチアゾリジン薬、ボグリボースを処方し追加にてシタグリプチン50mgを投与にて、腎機能の改善も示し、著効を示して、最終的にシタグリプチン25mg単独の投与で良好の経過“優”のコントロールが得られた症例につき検討を加えて報告する。

4) 鳥取県北栄町における中学生を対象としたヘリコバクター・ピロリ検診
— 胃がん一次予防に向けた試み (第一報) —

鳥取県立厚生病院内科	あきふじ 秋藤	よういち 洋一
北栄町 天野医院	天野	道磨
北栄町 岡本医院	岡本	恒之
北栄町 高見医院	高見	博
北栄町 宮川医院	宮川	鉄男
倉吉市 河本医院	河本	知秀
倉吉市 つくだ医院	佃	進
北栄町健康づくり推進室	伊垢離	順紅 大谷 真澄

平成25年2月からヘリコバクター・ピロリの除菌療法が保険適応となり、胃がん対策は二次予防から一次予防対応への拡大が期待されるようになった。平成27年度、鳥取県北栄町では中学3年生を対象として無料ピロリ菌検査を施行した。一次検査は尿中ピロリ抗体検査を行い、陽性者に対して尿素呼気試験を実施。両者陽性をもってピロリ菌感染者と判定し、希望者に対して除菌治療を行った。受診者は123人(受診率:86%)でピロリ菌感染者は9人(感染率:7.3%)であった。感染者全員に除菌療法を行い成功率は77.8%であった。今後、本事業を継続していく予定であり、胃がん撲滅に向けた有効な対策になりうると考える。

5) 上腸間膜動脈症候群の1例

鳥取県済生会境港総合病院内科	さかぐち たくき 坂口 琢紀	木科 学	中村 由貴
	能美 隆啓	佐々木 祐一郎	村脇 義和

症例:20歳代, 男性 主訴:嘔吐 現病歴:201X年8月10日頃より食後20分~2時間程度腹痛が持続しており, 8月31日に嘔吐が出現したため来院。既往歴:気胸, 縦隔気腫, 急性胃腸炎 身体所見:心窩部に軽度の圧痛ある他異常なし 画像所見:CTおよび腹部USにて上腸間膜動脈と大動脈の角度の鋭角化, 距離の狭小化を認めた。入院後経過:上部消化管内視鏡検査では十二指腸水平脚が狭窄しており, 消化管造影にて通過障害を認めた。以上より上腸間膜動脈症候群と診断した。保存的加療にて症状の改善を認めた。結語:上腸間膜動脈症候群は十二指腸水平脚が上腸間膜動脈を含む腸間膜根部と大動脈や脊椎との間に挟まれ通過障害を来す比較的まれな疾患である。今回, われわれは急激な体重減少を原因とする上腸間膜動脈症候群を経験したので報告する。

6) 平成22 (2010) 年度健診受診者の性別・年齢別の肥満の頻度

鳥取赤十字病院検査部 ^{しお}塩 ^{ひろし}宏

目的：健診受診者の性別・年齢別の肥満者の割合および1988年度と比較検討した。方法：平成22(2010)年度当院健診受診者のうち、体格指数BMI (体重(kg)÷身長(m)÷身長(m))を測定した男性3,034名、女性2,392名を対象とした。肥満者 (BMI \geq 25kg/m², BMI \geq 30kg/m²)の割合および1988年度と比較検討した。結果：1 肥満者 (BMI \geq 25kg/m²)は男女で22.6% (5人に1人), 14.7% (7人に1人), 肥満者 (BMI \geq 30kg/m²)は2.7%, 2.0%で男性が高頻度であった。2 年齢別にみると、男性では20代から50代(ピーク)で急増し、60代以降漸減している。3 一方、女性では年齢とともに急増し、60代がピーク、70歳以降漸減している。4 ヤセは20歳以上の男女で3.0% (33人に1人), 8.6% (12人に1人)であった。5 肥満者は約20年間で約1.5倍増えた。結語：中年男性と高齢女性の肥満の増加が懸念される。

7) 当院健診受診者にみられた単独低HDL-C血症 (\leq 29mg/d ℓ) の1例

鳥取赤十字病院検査部 ^{しお}塩 ^{ひろし}宏

背景：単独低HDL-C血症 (isolated hypoalphalipoproteinemia)とは、TGやLDL-Cが正常で、HDL-Cのみ低下している場合で、成因としてABCA1の合成障害、アポA-1の異常、LCAT活性低下などが考えられている。今回2009年、2010年の当院健診受診者において、2度低HDL-C血症 (\leq 29mg/d ℓ)を呈した症例は6例(男性5, 女性1)のうち、高TC, 高TG血症を伴わない低HDL-C血症 (\leq 29mg/d ℓ)を呈した症例が1例にみられ、まれなので報告する。症例：56歳, 男性 主訴：低HDL-C血症の精査 家族歴：低HDL-C血症の存在不明。既往歴：特記すべきことなし。現症：BMI22.1, 血圧124/80mmHg (降圧薬服用中), 眼底所見H1S1, 角膜輪なし, 眼瞼黄色腫なし, アキレス腱黄色腫なし。検査成績：TC123mg/d ℓ , TG94mg/d ℓ , HDL-C25mg/d ℓ , LDL-C79mg/d ℓ , LH比3.3, 心電図所見異常なし 結語：高血圧を合併していたが、動脈硬化は見られなかった。

8) 鳥取県独自の禁煙治療助成事業の評価について

鳥取県倉吉保健所 ^{よしだ}吉田 ^{りょうへい}良平
 鳥取県鳥取保健所 長井 大
 鳥取県米子保健所 大城 陽子
 鳥取県福祉保健部健康医療局 藤井 秀樹

目的：ブリンクマン指数200未満の場合でも治療費の保険相当分を助成する鳥取県の事業について検討した。方法：制度開始から平成27年度途中までの32例の属性や禁煙治療の成功率を調査した。成績：年齢性別の判明した者について、男女比18:8で男性に多く、年齢では20歳代が18名と多かった。また、5~

9年喫煙していた者が17名、5年未満が11名であった。治療終了後9か月時点での禁煙率は62%（16/26、不明等は除く）であり、平成21年全国調査の保険適用の禁煙率69.7%（636/912）とほぼ同等であった。結論：禁煙成功率を比較すると、助成事業利用者は全国データとほぼ同等であった。このことは、指数が200未満の禁煙治療でも、200以上と同等の治療効果がみられることを示している。今年度の診療報酬改定で、35歳以下はプリンクマン指数の制約がなくなり、保険診療での利用拡大の成果が期待される。

9) ロコモティブシンドロームの予防を目的とした必須アミノ酸を併用したロコトレ運動教室の有用性について

南部町国民健康保険西伯病院 木村^{きむら} 修^{おさむ} 小林 久峰 板 真悟

高齢化に伴い、ロコモティブシンドローム（ロコモ）の予防が重要視されるとともに、筋肉の増強には必須アミノ酸、特に分岐鎖アミノ酸の投与と運動が重要と考えられている。今回、われわれは町内の60歳以上の住民を対象に必須アミノ酸を併用したロコトレ運動教室を行い、有意な効果を認めたので報告する。20人の単位で必須アミノ酸（Amino L40）1包/日とロコトレ運動を併用した3か月間の教室を開催し、その前後における体組成、歩行機能、ロコモ度テスト、筋力を測定し比較検討した。このロコトレ教室は2014年度より、1年間に3回、計120人に実施した。筋肉の増強には分岐鎖アミノ酸、とくにロイシンが重要であることが知られており、今回のロコトレ教室ではロイシンを40%含有するAmino L40を併用し、ロコトレ運動教室を行った結果、身長伸び（姿勢の改善）、筋肉量の増加・体脂肪などの体組成の改善、筋力の増加、歩行能力の増加、ロコモ度テストの改善が認められ、Amino L40を併用したロコトレ運動はロコモ予防に有効である可能性が示唆された。

6 呼吸器疾患	11:01~11:19	座長	山本 芳麿（垣田病院）
---------	-------------	----	-------------

10) まれな肺腫瘍の1手術例

鳥取県立厚生病院外科 大島^{おおしま} 祐貴^{ゆうき} 吹野 俊介 松岡 佑樹
田中 裕子 兒玉 渉 西村 謙吾
浜崎 尚文

肺の粘液性嚢胞腺腫は非常にまれな腫瘍である。このまれな腫瘍の手術を経験したので報告する。症例は80歳代、女性、2009年に他院で結腸癌の手術を受けた。術後のフォローアップ中に左下葉のS8～S9の結節影が増大してきたので当科紹介となった。原発性肺癌、結腸癌の肺転移などを鑑別診断に胸腔鏡下手術を施行した。腫瘍を切除し、術中迅速診断で悪性像なし、真菌も鑑別にあがる等の病理診断であったので、左肺底区切除術を施行した。術後経過は良好である。左下葉の3.0cmの腫瘍は嚢胞状で内容はゼリー状、一部充実部分があった。病理の確定診断はCystadenoma of borderline malignancy, mucinous and serous typeであった。文献的にはほぼ良性の経過を撮るが、まれに転移再発もあり定期的なフォローアップが必要とされる腫瘍である。

11) 術後8年目に肺転移で再発した肺MALTリンパ腫の1手術例

鳥取県立厚生病院外科 松岡 佑樹 吹野 俊介 大島 祐貴
 田中 裕子 兒玉 涉 西村 謙吾
 浜崎 尚文

肺MALTリンパ腫は術前診断が困難であり、また比較的まれな疾患のため治療法も一定の見解が得られていない。一般的に緩徐な経過をとることが多い。今回われわれは、初回手術より8年後に対側肺に転移再発した肺MALTリンパ腫を経験したので報告する。症例は60歳代、男性。2007年に右S6に7cm大の腫瘍を認め、左下葉切除術を施行した。病理診断は肺MALTリンパ腫、放射線治療30Gyを追加して経過観察していた。術後8年目に、CTで左S1+2に少しずつ増大する1.5cmの陰影があり原発性肺癌の疑いで胸腔鏡下手術を施行した。術中迅速診断では小細胞癌疑いとなり、左上大区切除術を施行した。永久標本での病理診断は肺MALTリンパ腫、8年前の再発となった。リンパ節転移なし。術後経過良好で、抗がん剤を使用せずに経過観察している。

7 血液	11:20~11:38	座長	鳥飼 高嗣 (鳥飼内科)
------	-------------	----	--------------

12) 健診にて発見されたβサラセミアの1例

鳥取県立中央病院血液内科 福田 貴規 丸山 純子 橋本 由徳
 小村 裕美 田中 孝幸

症例は20歳代男性。当院初診の約1年半前から健診で赤血球増加、Mean Corpuscular Volume (MCV) 低値を指摘されており、改善を認めないため精査目的に当科紹介となった。Mentzer Indexは11.6と低値を示し、サラセミアを強く疑った。本人の同意を得て行った遺伝子検査によりβグロビン遺伝子の-31A→G変異を同定し、βサラセミアと診断した。サラセミアは、赤血球を構成する複数のグロビン鎖(α鎖、β鎖、γ鎖など)のうち何れかの産生が低下した疾患である。自験例のようなβグロビン鎖の産生低下をβサラセミアといい、日本では1,000人に1人程度の割合で存在するため、決してまれな疾患ではない。鉄欠乏性貧血との鑑別も必要で、遺伝子解析には十分に配慮する必要があるが、不要な検査、治療を避けるためにも患者が自身の病態について理解しておくことは重要と考える。

13) 血液疾患患者における末梢挿入式中心静脈カテーテル留置の現状

鳥取県立中央病院血液内科 橋本 由徳 福田 貴規 丸山 純子
 小村 裕美 田中 孝幸

緒言：近年、血管用アクセスデバイスとして末梢挿入式中心静脈カテーテル(以下PICC)が普及しその安全性と有効性が報告されている。今回われわれは血液疾患患者に対してPICCを留置し、採血、輸血、薬剤投与、造血幹細胞移植、オピオイドや鎮静薬の投与を行いその安全性と有効性を検討した。方法：2013年11月から2015年12月の期間、当科にてPICCを留置した患者を対象とし後方視的に解析した。結

果：95例，142本のPICCを留置．29例は複数回留置した．平均年齢65.5歳，延べ留置日数は8,089日，平均57.0日．107本で化学療法，12本で幹細胞注入，15本でオピオイドや鎮静薬の投与を行った．穿刺による重篤な合併症を認めず，カテーテル関連血流感染症(以下CRBSI)は18件，1,000カテーテル日あたり2.1であった．結論：PICC留置期間におけるCRBSIは低率で重篤な合併症を認めず，採血，輸血，造血幹細胞移植，鎮静薬投与等に問題なく使用可能であった．患者のニーズも高く今後広く普及が期待される．

8 心・血管 11：39～12：06 座長 岡田 耕一郎（岡田医院）

14) 重症下肢虚血に対して足関節にバイパス術を施行した1例

鳥取県立厚生病院外科 西村 謙吾 大野 貴志 田中 裕子
児玉 渉 浜崎 尚文 吹野 俊介

糖尿病患者や透析患者の増加に伴い，重症下肢虚血肢（CLI）が増加している．救肢のための下腿三分岐以下への血行再建は下腿バイパス（distal bypass）が標準となっている．当院では膝窩動脈より末梢の動脈に対する血管内治療を積極的に施行しているが，血管内治療が困難な症例や血管内治療後に再狭窄・再閉塞を来す症例に対してはdistal bypassが妥当と考えている．今回，CLIに対して足関節にバイパスを施行し良好な成績を得たので報告する．症例は80歳代男性．右下肢CLIにて潰瘍が軽快せずに安静時痛が増強してきたため入院．3DCTで右膝窩動脈より末梢は閉塞し，側副路を介して右足関節で右前脛骨動脈（ATA）が造影された．血管内治療は困難と判断し，右総大腿動脈と右ATAとを右大伏在静脈をnon-reversed graftとしてdistal bypassを施行した．術後右下肢の安静時痛と潰瘍は軽快した．

15) 当院透析患者の弁膜症の検討

鳥取市 三樹会吉野・三宅ステーションクリニック 吉野 保之 中村 勇夫 三宅 茂樹
鳥取赤十字病院 小坂 博基
鳥取市 宍戸医院 宍戸 英俊

目的：高齢化で弁膜症が増加しているが，透析患者はより発症率が高く，重症化速度が非CKDの2.5倍と早い．そこで，当院患者の弁膜症を検討．対象：2009年に心血管病のスクリーニング（以下，ス）を行い，弁膜症で要手術の14名（H群）と弁膜症なしの11名（N群）．方法：HとNの透析導入年齢，ス時の透析期間，BNPおよびHの手術と2015年末の転帰を検討．数値は中央値で示した．結果：透析導入年齢はHで62歳，N55歳，透析期間はHで10年，N12年，BNPはそれぞれ405，96pg/ml．弁膜症は大動脈弁狭窄（以下，AS）9名，僧帽弁閉鎖不全（以下，MR）3名，大動脈弁閉鎖不全（以下，AR）とAR+MRが各1名．手術は弁置換8名，僧帽弁形成術1名．死亡は6名（42.8%）で，術後死がAS2名，退院後に突然死と脳梗塞で各1名，手術せずのAS1名が突然死，MR+ARの1名が脳梗塞で死亡．Nの死亡は0．まとめ：近年，加齢による弁膜症が増加しているが，当院患者でも同様であった．しかし，死亡率が高く透析療法の影響が考えられ，重症化前の早期診断が重要．今回，ス時のBNPがNよりHは高値で，BNPは早期診断に有用．

特 別 講 演

12:15～13:15 座 長 山本 敏雄（野島病院）

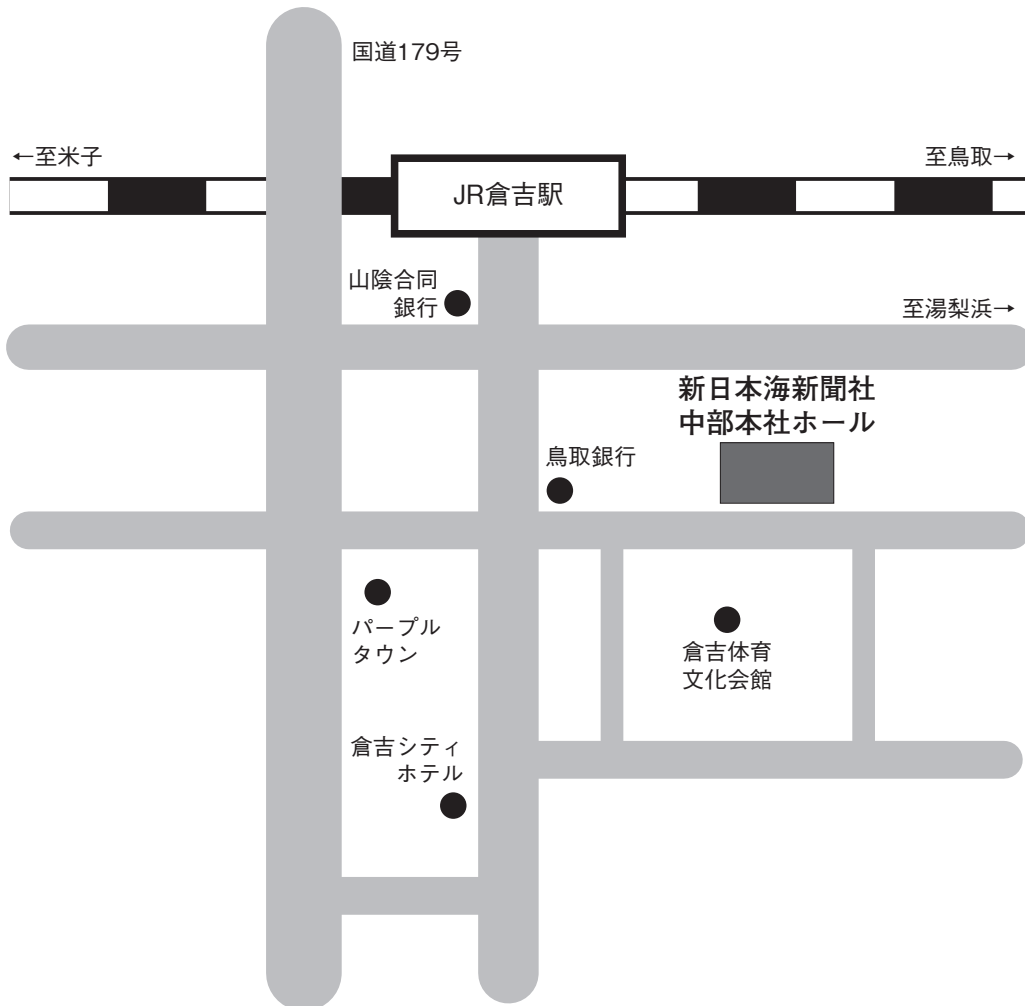
「男女共同参画社会における女性医師の現況と今後の課題 —日本医師会男性医師の意識調査報告書を参考に—」

医療法人十字会野島病院 内科
部長 松 田 隆 子 先生

平成11年男女共同参加社会基本法が成立、また本年4月より女性活躍推進法が施行されている。男女共同参画社会とは、「男女が互いにその人権を尊重しつつ責任を分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる」という理念に基づくものである。しかしながら、まだ、日本では、仕事に対する考え方や女性の就労に対する“文化の違い”がある。国際的に見て、経済分野、教育分野、保健分野、政治分野などのデータから算出されるジェンダー不平等指数（GII）やジェンダー・ギャップ指数（GGI）における日本の水準は低い。

日本の女性医師数は年々増加しているが、平成24年現在、男性医師232,161人に対し女性医師56,689人（80%：20%）で、全女性就業数のわずか2%である。女性医師の年齢別労働力率は、他の仕事の同性就業者と同様にM字カーブを描いており、仕事と育児の両立が困難な点がかがえる。男性医師の意識調査では、男性医師が育児や介護に協力したくても、できにくい事情や理由があることがわかった。今後、ますます多様化していく社会や医療の現場に女性医師の活躍は必須である。女性医師が仕事を継続するため、医師会や学会などの支援や取り組み、周囲の理解や協力に加え、男性医師も女性医師も意識改革の必要性、女性自ら政治・経済活動や意思決定をする機会への参加など、現況を述べ今後の対処について提言する。

新日本海新聞社 中部本社ホール案内図



鳥取県医師会報の全文は、鳥取県医師会ホームページでもご覧頂けます。

<http://www.tottori.med.or.jp/>

鳥取県医師会報 付録・平成28年5月15日発行

会報編集委員会：渡辺 憲・武信順子・辻田哲朗・太田匡彦・秋藤洋一
中安弘幸・延原弘明・加藤泰之・竹内裕一・縄田隆浩・懸樋英一

・発行者 公益社団法人 鳥取県医師会 ・編集発行人 魚谷 純 ・印刷 勝美印刷(株)

〒680-8585 鳥取市戎町317番地 TEL 0857-27-5566 FAX 0857-29-1578
E-mail : kenishikai@tottori.med.or.jp URL : <http://www.tottori.med.or.jp/>

〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はかい長瀬818-1

定価 1部500円 (但し、本会会員の購読料は会費に含まれています)



URL : <http://www.tottori.med.or.jp/>